

事務所：(160) 東京都新宿区百人町3-23-1 国立科学博物館分館内

電話 = (03) 364-2311 振替 = 東京1-6599

原稿宛先：(113) 東京都文京区弥生1-1-1

東京大学農学部森林動物学教室 樋口広芳

◎日本鳥学会の新評議員・役員◎

今年度は評議員の改選の年にあたりましたので、去る4月に評議員選挙が行なわれました。その結果は大会で報告されたとおりですが、投票総数161票(うち有効票153票、白票4票、無効4票)で、会頭推せんのみ3氏と山岸哲(大阪市大)、長谷川博(東邦大)の両氏が当選、羽田健三氏(信州大)が次点となりました。また監事は池田真次郎、松山資郎両氏の留任となりました。なお、今回の評議員選挙では、黒田長久、高野伸二、阿部学の3氏は新しい人材登用のため評議員候補を辞退されました。各人の得票数は下記のとおりです。

評議員	浦本 昌紀	140	竹下 信雄	136	吉井 正	137
	唐沢 孝一	128	中村 司	131	山岸 哲	14
	川内 博	119	中村 登流	136	長谷川 博	9
	古賀 忠道	134	樋口 広芳	142	(次点 羽田健三)	7
	小林 桂助	127	宗近 功	126		
	柴田 敏隆	138	森岡 弘之	137		
監事	池田真次郎	142	松山 資郎	147		

新評議員により会頭・副会頭を選出した結果、1979・80年度の会頭は古賀忠道氏(留任)、副会頭は吉井正氏(新任)と決まり、去る8月の大会で承認されました。なお、森岡弘之氏は、「鳥」の編集長を引き受けられた結果、今回は会頭・副会頭候補を辞退されました。この結果、役員は次のようになります(1979年9月現在)。

会 頭	古賀忠道
副 会 頭	吉井 正
編集委員	森岡弘之・樋口広芳・竹下信雄
庶務幹事	唐沢孝一・大塚 豊
会計幹事	川内 博・宗近 功
会合幹事	田中康久

(庶務幹事)

◎ 評議員選挙について ◎

今回の評議員選挙中に、2人の会員からお手紙を頂戴しました。会員のなかにはいろいろな意見があると思いますが、上田君の手紙には大分誤解も含まれているようですので、お2人の手紙を原文のまま掲載し、過去4年間学会の運営に携わってきた1人として小生の意見も述べたいと思います。なお、小生の意見はひとつの私見にすぎず、評議員会あるいは幹事会を代表するものではありません。

〈会員 橋本太郎氏の手紙〉

天候不順な3月でしたが、彼岸を過ぎましてようやく平穏な日が訪れるようになりました。本日は同封の投票用紙を受け取りましたので、早速〇印をつけてお送りいたします。前任の方々は2年間本当に御苦労様でございました。厚く御礼申し上げたいと思います。今回の候補者の諸氏はいずれも練達の方々でありますので、是非お願いいたしたいと存じます。どうかよろしく願いいたします。

昭和54. 3. 27

伊勢市朝熊町1510-5

橋本 太郎

日本鳥学会様

〈会員 上田恵介氏の手紙〉

評議員および監事選挙についておたずねします。

評議員および監事候補者の人選はどのような基準でおこなわれているのでしょうか。名簿をみてみますと、中村登流・小林桂助両氏以外は、殆んど関東一円のメンバーのように思います。当然、事務局が東京にあるのですから、集まりやすいメンバーをというお考えはわかるのですが、そうしたことが学会運営全体にマンネリをはびこらせ、inbreedingの弊害を生じているのではないのでしょうか。

日本応用動物昆虫学会のように全国区と地方区を並立した選挙方法は非常によいと思われまし、個体群生態学会のように、わりと小さな学会では全会員が被選挙人名簿に載せられて投票が行なわれるというのもよいと思います。

会頭推せんというのは、小生いろいろな学会を知っていますが、はじめてです。15名を13名にしても本質は同じだと思います。

できるだけ地方・地方の核になるような、主体的に学会運営にかかわる意欲をもっている人が選出されるしくみの選挙方法を考えて頂きたく存じます。

まあ、選挙方法が悪いのか学会自体の古い体質が悪いのか、どっちもどっちだと思いますが、一度評議員会で危機感をもった論議がなされることを望みます。

それから、投票用封筒は小型にして、中に入れて無記名で送れるようにされるとよいと思います。

1979. 3. 28

上田恵介

橋本太郎さんの意見は当事者にとっては大変ありがたいご意見ですが、おそらく会員の大多数

がこのようなご意見かと思われます。というのは、今回の選挙でも全体の $\frac{2}{3}$ にあたる100票以上の人が会頭推せん13氏にマルをつけただけで送り返して下さっているのです。もちろん、本当は15名を選んで欲しかったのですが、13名に対する信任を表すだけというのもひとつの意志表示ではあるでしょう。

小生も(そしておそらく評議員・幹事の多くも)現在の評議員選挙のやり方が欠点のないものだとは思いません。しかし、選挙用紙にも書かれていたように、この問題については評議員会は過去何回にもわたって、何時間もかけて検討を加えているのであり、以前小生がニュースでとりあげたこともあります。今回の選挙も決して場当たりで行なったわけではありません。

現在の問題点は、もし候補者を提示せずに名簿から適当な人を選んで投票してもらえば、投票率が現在よりずっと低下し、そのうえ票が分散し、選挙の意義がなくなるほど各人の得票数が少なくなる可能性が予測されることです(このことについては選挙用紙に述べてあります)。今回の選挙結果からも分かるように、山岸哲、長谷川博、羽田健三の諸氏のような名のよく知られた活動的な研究者でも、名前が出ていなければ得票が14票以下であり、いっぽう得票数1~3票の方が40名近くもあるのが現状です。投票総数は前々回が101票、前回は64票、今回は161票ですが、もし候補者の提示が行なわれなかったならば、過去の経験からみて投票数は50票以下になったでしょう。評議員選挙では当選に必要な最低得票数が決められていないので、たとえ得票が10票でも5票でも得票の多い人から当選になるわけですが、500人の学会で、10票や5票の得票に何の意義があるのでしょうか。現在の評議員選挙が信任投票の域を出ないのは認めますが、これはこれでひとつのパロメーターになっていると考えています。

候補者を提示せずに名簿によって選挙する場合のもうひとつの問題点は、現職が圧倒的に強く、全員留任のまま、新陳代謝がみられないことです。本会でも名簿に基づく選挙を行っていた時代もありましたが、戦後の長い間評議員はほとんど変わりませんでした。他の学会でも人事が固定化している事情は似たり寄ったりです。現在の鳥学会は、15名の評議員のうち4年前(評議員選挙は一時中止され、昭和50年に再開した)から留任の者が8名、幹事は8名のうち4年前から留任の者が4名で、4年間に評議員・幹事も半数が交代しています。このような学会は少ないでしょう。われわれは変りすぎであったとしても、固定的でなかったのは事実が示すとおりで、学会の運営に関しても、あとで述べるようにこの4年間ほど新しいことを取りあげたことは過去30年間になかったと思います。上田君は、いったい何を根拠にして学会の運営にマンネリをはびこらせ、inbreedingの弊害を生じているのでしょうか。もし人のやることはすべてマンネリに見えるのであれば、その人の頭脳こそマンネリ化しているというべきでしょう。

われわれの企画のすべてが成功しているとはいいませんが、過去4年間に行なった改革の主なものをあげると次のようです。

- (1) 鳥学会ニュースの発行(新規)。
- (2) 機関紙「鳥」を季刊(ただし現在2/3号は合併号)、年1巻発行とする(従来は号数制で年2冊発行、それも近年は合併号で年1冊出るか出ないかであった)。
- (3) 鳥学双書の復刊(戦後はじめて。すでに2冊が刊行されている)。
- (4) 月例幹事会を開く(新規。従来は各幹事がばらばらに仕事をしていたため、編集幹事は予算が分からず、会計幹事は単なる金の出し入れ屋で、計画性がなかった)。
- (5) 例会関係の拡充(例会は今までも行なわれていたが、会合幹事を中心に例会を企画し、その通知は会員全員に出すことにした。従来は例会の通知を東京近郊の会員にしか出していなかった。なお、最近では例会案内を新聞にも出しているため、来会者は常時60~80人あり、今まで

の倍増である。例会通知を会員全員に出すためには費用がかかるが、それは1人200円の例会費(新規)の徴収でまかなうことにした。経済的にも最近の例会は黒字に近いものとなっている)。

(6) 会計を一般会計と特別会計とに分け、また基金の拡充をはかる(従来は一本であった会計を一般と特別に分け、原則として一般会計では会費・大会費・例会費・バックナンバー売上げに対して「鳥」の発行と例・大会を開催し、特別会計はその他の事業と基金を扱う。つまり機関紙発行・例会の通常活動と鳥学双書の発行などの事業関係の独立採算制で、赤字部門の発見と合理化を容易にした。基金は従来の老田・斎藤基金に加えて、内田基金と黒田基金が発足した)。

(7) 「鳥」を学術刊行物とした(新規。この結果郵便料金の値上げがあったにもかかわらず、発送費は以前の $\frac{1}{4}$ になった)。

このほか幹事の公募(この時は石原由雄さんが幹事となり、図書整理その他をして下さった)や大会のシンポジウム(今年の大会ではじめてシンポジウムを行なった)など、やりかけたことはたくさんあります。

以上のことはともかく、4年前山階鳥類研究所から国立科学博物館分館に事務所を移転した当時、15万円の会費くり越しに対し46万円の「鳥」未出版の負債がありました。各学会とも台所が苦しい時世に、それを4年間で2年分の経常費に相当するほどの預金残高(約300万円、今年度大会現在)にしたのは、評議員・幹事がマンネリでもinbreedingでもなく、新しい改革に積極的にとりくんだ結果だと考えます。

すでに述べたような理由で、現状では評議員選挙にあたって候補者を提示する必要があります。上田君がよいという、候補者提示なしの会員名簿による投票は現実的ではありません。この点については、われわれの方が上田君よりはるかに経験があります。ただし、候補者の提示方法は会頭推せんが唯一のものではありません。立候補の形もありますし、第三の機関を作って選ぶ方法もあるでしょう。また、15名の候補者を提示することも、15名以上または15名以下の候補者を提示することも考えられるでしょう。われわれも評議員会でそれらを検討しましたが、それぞれ一長一短があるので、今回はすでに行なわれたやり方にしたのです。確かに会頭推せんという形は他の学会であまりやっていないでしょう。しかし、それだからやってはいけないという理屈はないでしょう。幹事の公募をした学会もおそらく例が少ないのではないのでしょうか。

なお、会頭推せんの候補者の人選は評議員会でなっています。評議員候補の人選を評議員会でするのはそれこそおかしいではないかといわれそうですが、会頭推せんのそもそのねらいは、評議員会にも大会にもほとんど出てこれない名前だけの評議員はできるだけ退任してもらい、現に学会の仕事をしている若手(幹事)に評議員になってもらおうということであったのです。そしてこの原則はまだ生きていて、評議員として働けない場合は自発退任ということで、すでに述べた新陳代謝が行なわれていると理解して下さい。

学会の体質という点では、確かに日本鳥学会は数学会や物理学会や内分泌学会といった主として研究者をメンバーとする学会とは違います。われわれの学会は、応用動物昆虫学会や生態学会とも研究者の層の厚さの点で比較になりません。日本鳥学会は、学会とはいえ会員の9割以上がアマチュアです。これは上田君のこのような体質の古い、新しいの問題ではなく、研究者の絶対数が少ないことに主な原因があります。ですから、大学や研究機関のメンバーをたくさんかかえている学会のまねをしても、うまく行くとは限らないのです。

最後に東京対地方の問題ですが、小生も地方での研究と学会活動が盛んになることを望む者です。しかし、それは地方在任の評議員を増やすことで解決できることでしょうか。われわれがここ数年もつとも熱心に改善してきたことは肩書きだけの評議員をなくすことでした。研究や学会

活動をするのに評議員の肩書きが必要と考えるのであればナンセンスでしょう。学会活動は誰がやろうと、何をやろうと原則として自由です。だから、例えば例会にしても、例会が東京に偏しているというのはおかしいので、それぞれのところで自分たちの meeting を持てばよいのです。実際、東京の場合、会員が相当の労力を払って例会を維持しているといったほうがよいでしょう。体を動かさなければ何もできません。主体的に学会の運営にかかわる意欲を持った人を評議員にせよということですが、評議員を拝命するまで意欲をかかえてじっと待つてなくてもよいではありませんか。この点では山岸君が近畿地区懇談会をはじめたのはよい方向だと思います。

以上個人的な見解ですが、上田君の疑問に答えます。なお、これを機会に論議が活発になれば結構だと考えます。
(森岡弘之)

◎ 大会における研究発表を考える ◎

1979年度の日本鳥学会大会に参加して感じたこと、特に研究発表について、私の考えを簡単に書いておこうと思います。他の学会における研究発表についても、これから書くような点について、以前から気にはなっていたのですが、今大会でその感を強くしたというところです。

おもに研究発表をする側の問題について触れたいと思いますが、大会を運営する側にもいくつかの希望を出しておきたいと思います。

研究発表者側の問題：決められた研究発表の制限時間（今大会では15分間）内に発表を終えず、他の研究者の発表時間を食いつぶすような発表は論外としても、今大会では15分間のほとんどを発表に費やした研究者（あるいは、そのグループ）が多いようでした。その結果、「質問は後で個人的にして下さい、ノ」という座長の発言が多くなったのだと思います。もし、その研究者が誰からも個人的に質問を受けなければ、彼は発表しつばなしで再び自分のフィールドにもどっていかねばなりません。ここに問題があると私は思います。「発表しただけでもいいじゃないか」という人もいるでしょう。しかし、私は発表しただけでは大会に参加する意義の半分位しか達成されていないのではないかと考えます。それでは、大会で研究発表するとはどういうことなのでしょうか。アマチュアの研究者の単なる自己満足のためか、あるいはプロの研究者の業績づくりの場ではないのでしょうか。私は、自己満足のためでも、業績づくりのためでもいいと思います。ただし、それらを裏打ちするものが、大会で研究発表することの意義として存在しているはずで、その意義がおろそかにされているのではないかと私は心配しているのです。

大会で研究発表することのメリットをあげてみます。

- (1) ある研究者が「自分は現在こんな仕事をしていて、それがこのレベルまで進んでいます」ということを他の研究者に知らせる。これにより、何年先になるかわからない論文発表以前に、その時点での研究の流れ、その時代のトピックを知ることができます。
- (2) 発表するためには、その研究者はその時点までの研究を、他の研究者が理解できるように整理する必要があります。それによって、自分の研究のデータの不足している部分、弱点等を自分なりに明らかにすることができます。
- (3) 研究発表を聞いた他の研究者は、その研究に用いられた方法論、結果、考察等を検討し、その研究内容を評価します。同様に、発表された研究内容を自分の研究と比較し、取り入れるべき点があれば入れ、自分の研究の向上をはかろうとします。
- (4) 聞く方の研究者は、研究発表に対する疑問点を明らかにするため質問し、あるいはコメン

トすることによって得られる相手の反応から、発表された研究内容、考え方をより深く理解し、(3)のメリットをさらに大きくできます。

(5) 研究発表者は、その研究に対する質問、コメントから、自分とは異なる視点、発想のあることを知ります。それは今までの研究を別の角度から検討することにつながり、研究に幅ができ、その研究への理解を一層深めることになります。

これらの他に、いくつかのメリットはあると思いますが、主要なものはこのようなものでしょう。これらの中で、私が重要視するのは(4)と(5)です。要するに、研究発表では、発表する側もそれを聞く側も相互に啓発するという点が重要だと思います。勿論、他の方法でもこのようなことを行う機会がありますが、大会では短時間の間に様々な考えを持つ研究者と接触できるというのが魅力です。そうしますと、発表しっぱなしで帰った研究者のメリットは(1)と(2)しかなく、それを聞いた方は(1)と(3)のメリットだけしか受けないことになります(ただし、聞く方に疑問点があって、それが解消されなければ、聞くだけ時間のムダということにもなりかねません)。質問時間をとらなかったために、発表した方は、ひょっとしたら今後の研究に新しい展開があるかもしれない(5)のメリットを、みすみすのがしてしまったのかもしれない。同様に、聞く方でも、聞きっぱなしでは、(4)、しいては(1)(3)のメリットを得られないのかもしれないのです。

今大会では、研究発表の持ち時間は事前から15分間とわかっていました。私達の場合、発表に10分、質問に5分あてる予定で内容をまとめました。実際の運営では、各々12分、3分でしたが、とにかく、10～12分間で自分の仕事と考え方をまとめる必要があります。どうしてもその時間内でまとまらないのなら、その中のトピックを2つに分けて、発表を2つ行う等の処置が必要になってきます。このどちらもできないというのでは、ある意味で、その研究者の能力を疑わざるを得ません。

たとえ、発表時間が短いものであっても、その時間内で自分の考えを述べ、なおかつ相手の考えも聞かなければならないのです。それには大変な労力の消費を伴うかもしれませんが、そのみかえりのメリットを考えますと、そうした努力は惜しんではならないように思います。

大会を運営する側の問題：今大会ではあまりにも時間通り進めることに終始したせいか、上記したように、時間になれば質問を打ち切りざるを得なかったようです。しかし、(4)(5)のメリットを考えるなら、多少時間がのびても、若干の質問は受けつけるべきだったように思います。

他の学会も含めて、大会での研究発表は15～20分間位が標準のようです。鳥学会では、どういう理由で15分間としているのかは知りませんが、私はもう少し長くてもよいように思います。残念ながら、鳥学会大会への参加者は他の学会に比べて少ないというのが実情です(若干の研究者で、他の学会では発表するが、鳥学会ではほとんど又はまったく発表しないという人もいるのも事実です。この問題はまた別の大きな問題ですので、ここでは触れませんが、何故かを一度考えてみる必要があるように思います)。参加人数は多に越したことはありませんが、少ないのなら少ないなりに、じっくりと研究内容を議論する余裕があってもいいように思います。

最後に、今まで書いてきたことをまとめる意味で、研究発表者と鳥学会に望むことを書いてみます。

前述のように、発表する側は決められた時間内に、質問の時間を考慮して、研究の目的、方法、結果、簡単な考察をすべて盛りこまなければなりません。そのためにはいろいろな方法を用いて、相手が容易にその内容を理解できるようにしなければなりません。例えば、研究内容を視覚にうつたえ理解しやすくするためのスライドの利用は非常に有効です。しかし、10分間位でスライドを20枚も30枚も映すのはかなりむずかしいことのように思います。有効な手段も使い方に

よっては無用の長物になりかねません。そういったことも考慮し、実際にその研究発表がどの位の時間を要するか、リハーサルも必要となるでしょう。予想される質問の答も用意しておかなくてはなりません。しかし、むしろ予想もつかない質問、コメントを研究発表者は期待すべきかもしれない。一般に、研究発表は1分のすきもなく構成しようとはしますが、逆に、その研究の弱点をみせて多くの人からコメントをもらうのも一つの方法です。とにかく、今後の自分の研究のために、他の研究者が質問したり、コメントする時間を何としてでもつくろうという意識が必要だと思えます。研究発表者には、発表することの意義を考えて、発表されることを希望します。

鳥学会に対しては、大会での研究発表を20分(発表15分、質問5分)にすることを希望します。発表を20分にしますと、1日では発表者全員が発表できなくなることが考えられます。大会参加者が少ない現状では、会場を2つ以上に分けるのは無理でしょう。研究発表を2日間行ない、シンポジウム等の記念行事を行わないか、あるいは大会の全日程を他の学会並に3日で消化してはどうでしょうか。

以上、大会での研究発表についての私の考えを簡単に書きました。私は研究内容を議論する場をもつかもたないかで、今後の鳥学会の方向が決まるのではないかと考えています。議論する一つの場としての大会が、ほんとうに議論ができる場になることを希望して筆をおきます。

(松岡 茂)

◎ 本会関係の出版物 ◎

☆新出版物

ネチャエフ著・藤巻裕蔵訳、日本鳥学会鳥学双書第17編「南千島の鳥類」(1979年7月発行) A5版200頁8ボ組み、定価1,900円(送料込み)

日本鳥学会編「日本鳥類目録第5版」第3刷、学習研究社発行(1979年8月)75年発行の第2刷と内容は全く同じで、英文・和文・補遺の3冊セット。定価8,000円(送料込み)

☆次の出版物は在庫があります。一部は、一時品切れとなりご迷惑をおかけしました。この機会にぜひお求め下さい。

日本鳥学会編「日本鳥類目録」第1版、1922、英文A5版200頁。定価2,000円(送料込み)。

黒田長礼著「世界のオウムとインコ」1967、A5版850頁、定価5,000円(送料込み)

黒田長礼著「世界のジャコとウズラ」1970、A5版410頁、定価4,000円(送料込み)

黒田長久学位論文「ミズナギドリ類の系統」英文、定価2,500円(送料込み)

申込みは同封の振替用紙を使用し、通信覧に御希望の書名を記して送金して下さい。

◎ 「鳥」の原稿募集について ◎

「鳥」28巻1号の出版がおくれて申し訳ありません。おくれた理由は「鳥」の新しい要項づくりや印刷所を変えたためです。

「鳥」28巻2/3号はすでに原稿の検討がほぼ終り、来月初めには印刷に入ります(年内に出版)。28巻4号の原稿も編集者の手許にだいたいそろっています。

「鳥」29巻1号の原稿を募集します。とくに期限はありませんが、原稿の登載は原則として先着順ですから、投稿希望者はなるべく早く原稿をお送り下さい。ただし、編集委員会の権限で学術論文として不適当な原稿を返却したり、編集の都合で先着のものをあとまわしにすることがあります。とくに長い論文は紙面の都合で早くなる時もおそくなる時もあります。

「鳥」の新しい要項は、決った分だけでも次のニュースで発表しますが、最終案がまとまるのには2年くらいかかるでしょう。投稿者はとりあえず28巻1号の体裁を参考に原稿を作成して下さい。なお、原稿はコピー1部とり、2部をお送り下さい。また、郵送中の紛失事故がときどきありますので、原稿は書留で送るか、手許にもコピーを残して下さい。

(編集委員)

◎ お 知 ら せ ◎

☆ 11月1日から来年1月15日まで、森岡弘之氏がネパールに出張のため、学会に急用のある方は下記のいずれかに連絡して下さい(電話は夜間だけ)。

〒167 東京都杉並区善福寺3-5-10

川内 博 Tel 03-395-5380

〒272 千葉県市川市新田3-20-12

唐沢 孝一 Tel 0473-22-3735

☆ 今回は評議員選挙や全国大会について多くの紙面をさきました。会員各位大いに論議もし、検討していただき、より意義ある学会に発展できればと願っています。

会費：年額3,000円(入会金2,000円)。入会のお申し込みは会計幹事の川内博(〒167東京都杉並区善福寺3-5-10)まで。
会計年度は4月から翌年3月までです。